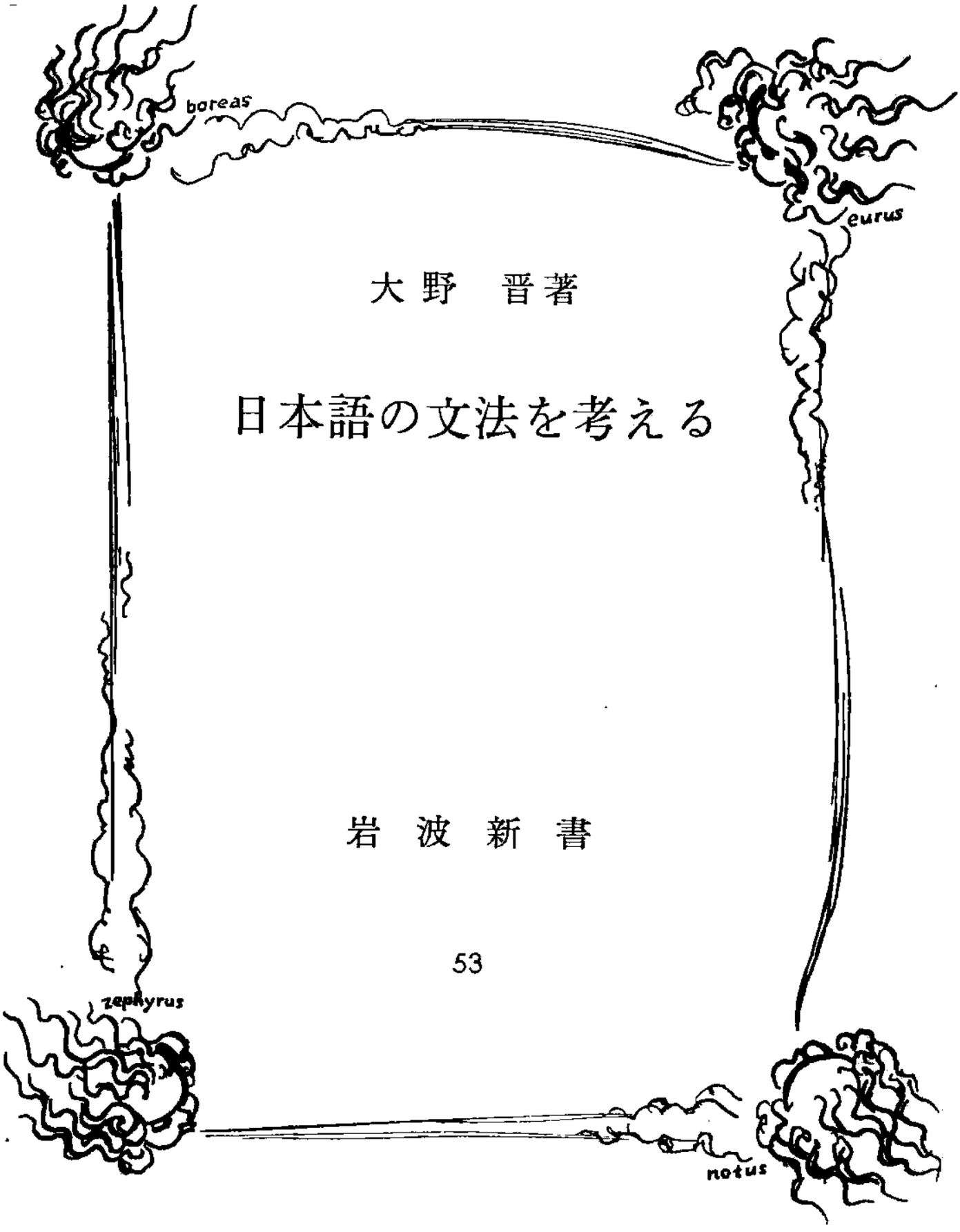
大野　晋著

日本語の文法を考える

岩波新書

53



大野　晋著

日本語の文法を考える

岩波新書

53

大野　晋

1919年東京に生まれる
1943年東京大学文学部国文学科卒業
専攻—国語学
現在—学習院大学文学部教授
著書—「日本語の起源」
「日本語をさかのぼる」
「上代仮名遣の研究」
「萬葉集」(共著)「日本書紀」(共著)
「岩波古語辞典」(共編)
(以上，岩波書店刊)
「日本語の年輪」

日本語の文法を考える　　岩波新書(黄版) 53

1978年7月20日　第1刷発行 ©
1978年9月10日　第3刷発行

¥280

著　者　大野晋

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

まえがき

日々の社会生活のこの激しい変化。人間観、価値観の大きな疎隔。年が三つ違えば、もはや考えが通じない、相手が分らないと口にする若者が多い。必ずや日本語も大きく変ってゆくだろう。語彙や表記の面ではもはやそれは明瞭である。しかし言語の変化は語彙・表記のそれにとどまらず、新しい考え、新しい表現を求めて文法的な形式の上にも変化は種々現われてくるに相違ない。しかしまた、過去の言語体系は牢固として日本人の思考の運営をしばり、依然として、いわゆる日本的な発想の類型に日本人をとりこめようとするだろう。

この大きな転換点に立つ日本語とは、どんな言語なのかについて、及ばずながら私は問い、かつ考えてきた。今ここに『日本語の文法を考える』と題したけれども、これは体系的に日本文法を記述しようとするものではまったくない。これまでの文法学で扱われた題目、文とか、名詞とか、ハとガとノとかを取りあげながら、私が日本語について考え、大切だと思うこと、研究してきたことを自由に語ろうと思う。

日本語の将来について、また過去について私の見るところを述べ、古典語も多く取り扱ったが、それはたんに過去の事実を明らかにしようと意図したのではない。古典語における事実が、

実は現代にも力強く生きており、混沌の中で見えなくなっている現代日本語の持つ弱点やら片寄りやらを、それがかえって明白に示していると思われることが多いからなのである。

もちろん、私の研究の至らなさの結果、説いて不足なところ、あるいは異論の多いところ、または誤っているところも少なくはあるまい。だから、より広い、より深い、より的確な日本語の理解を相互に目指して言葉をかわし、論議を重ねることを私は期待している。言語への取りつき方には、いろいろな道がある。問いの出し方も解き方もさまざまである。その交響の中に、すぐれた洞察が生まれてくるだろう。

もとこれは或る所で行なった講演の記録に手を入れたものである。文章に口頭語の言いまわしがところどころ見えるのはその結果である。この仕方は、なるべく平明な日本語を望んだからであったが、果してそれは思いのように実現しているかどうか。

一九七八年五月

大野　晋

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目　次

まえがき
1　不幸な学問……一
2　未知のことを伝えれば足りる……九
3　既知と未知……三
4　何をとらえて名づけるか……五
5　ウチとソト……七
6　状態と情意……八

7　活用の未来と過去と……九九
8　判断の様式……一一九
9　東西の力関係と主格の助詞……一四五
付　動詞活用形の起源……一七九
補　註……二二三

1 不幸な学問

文法という学問は今日の日本では不幸な状態にあると思う。文法を組織的に学ぶのは中学校あるいは高等学校からだろうが、そこで国語を教える先生に、文法の好きな人が非常に少ない。一般に国語の先生は文学が好きで語学は好きでない。ことに文法は好きでない。それは先生が文法をよく習っていないせいかもしれない。私の経験でも、大学の国文学科での三年間に、ついに文法の講義はなかった。文法の学問を習っていなくては、教壇に立ってよく教えることができるはずがない。せいぜい自分が受験のときに覚えた知識、たとえば、動詞が「か・き・く・く・け・け」と変化するとか、「け・け・く・くる・くれ・けよ」と変化するとか、その程度の知識で文法を教えようとする。それではうまくいかない。文法は断片的な知識ではなく、一貫した体系・組織なので、一度はしっかりと根本から学ぶ必要がある。ところが、好きでない先生には、それを自分で勉強しようとする意欲があまりない。教える人がわからないままで教壇に立つ。その授業が生徒におもしろいはずはない。まず第一にそういうことがある。

第二に、もし文法が好きな先生がいたとしても、実は日本語の文法の学問がまだ整っていないという事情がある。日本語の性格はヨーロッパの言語と非常にちがう。単語がちがうのは当

然としても、文法的な仕組みがちがう。日本語と同じような文法の仕組みをもっている言語は、朝鮮語、満州語、蒙古語、トルコ語とか、ハンガリー語、フィンランド語などである。けれども、これらの言語の精密な研究を通して、これらの言語との比較文法論を確立し、それによって日本文法を考え直すという研究は未だ誕生していない。ヨーロッパ語の文法を学んだ人々が、ヨーロッパ語の目で見て日本語の文法を組織立てることが多かった。ところが、ヨーロッパの言語の文法によってそれとは性格の異なる日本語の文法の大事な点を見ぬくことは、きわめて困難なのである。それならどうすればよいか。自分で自分の言語の文法を考えて組織立てていく以外に方法がない。

だいたい明治以後の日本の学問・技術は、ヨーロッパから輸入したいろいろな学問・技術によって切り開かれてきた。医学にしても工学にしても、もし日本によい医者がいなければ医者をヨーロッパから連れてきた。あるいは橋をかけたいと思えば橋をかける技師を連れてきた。鉄道の技師を連れてきた。そしてその人たちにお手本を見せてもらう。それを覚えて、次には日本人が自分の手でつくるという順序でやってきた。

ところが、言語についても、ヨーロッパの学者を連れてきてヨーロッパ語を見た目で日本語を見てもらえば、すぐ日本語の性質がわかるかといえば、なかなかそうはいかない。つまり、その言語のなかで育ち、ものを認識する力をその言語によって養ってきた人間たちの中へ、全然ちがった性質の言語で育った人間が入っていって、簡単にその言語を分析できるかといえば、

それは実際には非常にむずかしい。たとえば、アイヌ語の研究の場合でも、アイヌ生れの知里真志保氏によれば、日本人が非常に努力をしても、やはり日本人のアイヌ語理解はとどかないところがあるということだった。このようなことは、おそらく世界のどの言語についてもあてはまるだろう。そう考えると、日本語の文法を研究するためには、日本語で育った人間が自分で自分の言語を深く広く反省し、これを考えてゆく努力をする以外にない。

世の中で一番むずかしいことは、「自分自身を知る」ことであるという。何も文法などという学問を知らなくても、日本で育てば日本語を使うことはできる。話すこともできる。勉強すれば書くこともできるようになる。してみれば、日本語を振り返って自分でその文法を考えてみようという努力は、自分自身を見つめて、自分で自分を限定しようということで、かなりむずかしいことである。

もちろん、日本で自分たちの言語の文法を見極めようとする努力をした人が、明治時代以来なかったわけではない。ただ、全体として数が多くない。研究がいろいろな分野にわたらなければならないのに、その必要にくらべて文法学者は少なかった。その結果、学問がまだ十分に整っていないところがある。だから、たとい文法が好きな先生や学生がいたとしても、知りたいと思うことにすぐさま適切な答えが得られない場合が多い。

第三として、も一つ重要なことがある。文法とは、いろいろな言語上の現象を整理して把握し、理解しようとする仕事である。たとえば動詞の活用でいえば、「こ・き・く・くる・くれ・

こ」とか、「せ・し・す・する・すれ・せよ」とかの形に変化を整頓する。あるいはまた、四段活用とか上一段活用という名をつけて整理するといったように、文法の学問は言語を貫いている法則性をつかみとろうとする。その結果、分ったことをまとめれば非常に簡単な規則になってしまうことが少なくない。

それで、文法があまり好きではない先生は、そうした整理がどのような手続きを経るものか、整理された結果がどのような意味をもつかなどを考えずに、整理した結果だけを生徒に覚えさせようとする。つまり文法が規則の暗記の学問になってしまう。すぐれた生徒ほど、なぜであるか、どうしてであるか、例外はないのか、といったような知的な興味をもっている。その生徒が「係結びという現象があるのはなぜですか」などと質問しても、答えが得られない。時には逆に「そんな質問をする奴があるか。あるからあるんだ」と叱られるかもしれない。それほど文法の授業は、規則を暗記させる授業に落ち込んでいる。言語感覚のすぐれた生徒ほどこれに反発を感じるに相違ない。その上、教えられる規則たるや必ず例外が出てくる。ことに現代語については、誤用をふくめて、例外は簡単に見出せる。しかも、それらの原因とか理由などまですぐには説明できない場合も少なくない。そうなると、規則として教えられたことが実にあやふやに感じられる。

本来、言語の発音や意味などは時代的に少しずつ変化していくものである。文法も例外ではない。たとえば、これは日本語の例ではないが、私たちが中学生のときに習った英語からみれ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ば、今日、中学校で教えている英語は実に奇妙で、Do you have a book? と教科書で教えている。これは今やイギリスでも普通に使う形だというけれども、私たちが中学生であったときには、Have you a book? が正しい形で、Do you have a book? と書けば誤りであり、そんな形はまったく劣等生の書く英語とされていた。それが今日では世界中に通用する形と認められている。英語であるからわれわれは何の異存もなしに、これを受け入れているが、もし日本語だったらどうだろう。「見れる」「起きれる」「受けれる」のような形を教科書に取り入れれば、おそらく多くの人は、このような形は不正な形である、誤りとして正さなければならないと言い、別の人は、社会一般がこの形を使うようになったのなら、それはよい形なんだと言うに相違ない。その議論は簡単にはおさまらないだろう。また、shall と will の使い分けなども、昔の中学生にとってはぜひ覚えなければならない重要な事項であったのに、今日ではその区別をほとんど問題にしていない。これらは時代的な言語の変化が眼前で進行し、完了しつつある一例である。だから文法もそれを永遠に変らないものと見ることはできないわけで、規則の例外をどう考えるかは重要な問題である。にもかかわらず、それを細かく取り扱い、それの生じてきた原因まで説明できるようになるのは実は容易でない。そこで先生は生徒に暗記だけを強制しようとする。

このような不幸な状況にある日本語の文法に対して、私がなぜ興味をもったかといえば、私が中学校の後半になって英語が少し読めるようになり、英語と日本語とをくらべて考えること

が自然にできるようになったとき、生じたひとつの疑問があった。日本語の文章には主語のない、主語・述語の照応しない文章が非常に多い。ところが、英語では主語・述語が応じ合って文であると習う。聞いてみれば、たしかに主語・述語が応じ合うことは重要である。にもかかわらず日本語では、主語を省略した文、主語のない文が多い。それでも、われわれは日常生活にほとんど困難なしに暮らしている。ということは、いったいどういうことなのか。たとえば外から扉をたたく。中から、

「入ってます」

と答えが返ってくる。これで分る。これで十分である。これは便所の話で、中からの答えに「ぼくが入ってます」などと主語をいう必要は全然ない。日本語ではそれでいい。いったい主語は本当に必要なのか。しかしまた、

「行こうと言ったんだけれども、いやだと言ったもんだから、怒っちゃって、帰ってきたんだ」

といったような表現の例では、実際には登場人物が四人いて、Aが行こうと言ったけれども、Bがいやだと言ったから、Cが怒ってしまい、A、B、C、Dともに帰ってきたという話だという。こういう会話をすることが可能な日本語とは、いったいどんな言語であるのか。

それに、ドイツ語やらフランス語やら英語やらのヨーロッパの言語を勉強した先生たちは、しばしば日本語は非文法的な言語であるという。あるいは日本語は非文法的な言語なのかもし

れないと疑わしくなってくる。しかし、そうした疑問を抱くと同時に、それに対して私の心の中には「日本語には日本語としての仕組みがあるのではないか」という考えが消えなかった。それならば、日本語の日本語らしい仕組みとは何なのか。それを明らかに知りたいというのが、私の出発点だった。

2　未知のことを伝えれば足りる

それについての一つの答えらしいものが、ようやくこのごろ私に見えてきたように思う。それで、まずそのことについて述べてみたい。

言語の働きとは何か

それには言語とはいったいどんな役割をするものなのかということを少し考えてみなくてはならない。

まず、言葉がかわされるには、「我」という話し手があること、そして「汝」という話の相手があること、これは必要な条件である。そして、「我」が「汝」に対して、「汝」の知らない何かを伝えたいと思う。その「伝えたい何か」がある。話し手がもし相手に対して何も働きかけるつもりがない、いいたいことがない場合には、何の言語も発しない。また聞き手が相手に何の関係も持ちたくないと思うなら、相手が何をいおうと「馬の耳に念仏」で、それを聞き流すにちがいない。それゆえ、話し手が相手に伝えたい何かを持つ、また聞き手がその話す相手から何かを聞きとろうと思う、そのときに言語はその役割を果す。

たとえば、

「火事！」

と叫ぶ。これは一つの単語を叫んでいるだけだけれども、この際、「火事！」という叫びは自分がもっとも伝えたいと思うことをそのまま伝えている。これで必要なことを満たした実際的な表現、つまり文である。それを聞いて、

「火事？」

と、寝ぼけて答えた。これも一つの単語にすぎないけれども、その口調のなかに「なんだって、火事だって？」という気持が十分表わされている。これもまた文である。つぎに、

「起きろ！」

という発言がある。これもきわめて短いけれども、伝えたいと思う命令を十分に伝えていて、また文である。あるいは、

「あぶない！」

というのも文である。つまり、相手に何か知らせる、命令する、自分の気持を投げ出す、そういう表現が文である。右の例では、その知らせ・命令・感情がたった一つの単語で叫ばれているけれども、表わされた物・事柄と、それをいう語気とで文の表現として足りている。その場合、主語とか述語とかを整える必要はない。

「何食べる？」

「うなぎ」

この場合も、「うなぎ」という答えは必要にして十分なことを答えている。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com